大阪インターナショナルチャーチ ゲストスピーカー　ブラッドフォード・ハウディシェル
出エジプト記 4 章 2 節 と 20 節

2024/05/26

タイトル 「小さな人も、小さな場所も」
鍵となる聖句： 出エジプト記 4 章 2 節 と 20 節 - 「主は彼に仰せられた。「あなたの手にあるそれは何か。」彼は答えた。「杖です。」…20 そこで、モーセは妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せてエジプトの地へ帰った。モーセは手に神の杖を持っていた。」

皆さん、おはようございます。また皆さんにお会いできてうれしいです。ここ数年、私は、自分のお気に入りの一人であるフランシス・シェーファーというクリスチャンの牧師から学んだことを紹介してきました。今日もまた、彼の著書を紹介する代わりに、彼の説教を紹介しようと思います。フランシス・シェーファーは、私の世代とその直前の世代の多くのクリスチャンに大きな影響を与えました。実際、過去何年もの間、ここ大阪インターナショナル・チャーチでミニストリーをしてきた何人かの人たちにも彼は影響を与えました。シェーファーは、1950 年代にスイスに住んでいたアメリカ人宣教師でしたが、霊的な危機を経験し、クリスチャン生活とクリスチャン宣教へのアプローチ全体を考え直しました。彼は宣教団体を去り、ラブリ・フェローシップと呼ばれる全く新しいミニストリーを始めた。「ラブリ」とはフランス語で「避難所」を意味します。フランシス・シェーファーと妻のエディスは、キリスト教信仰に関するさまざまな疑問に悩む大学生や年配の人々に、シェルター、精神的な避難所として自宅を開放しました。ラブリ・フェローシップは、聖書的で知的な観点から、率直な疑問に対する率直な答えを誰でも聞くことができる場所として知られるようになり、多くの人々がラブリ・フェローシップを訪れるようになりました。キリスト教信仰に関する正直な疑問に対する正直な答えです。このミニストリーはスイスで始まり、その後イギリスに 2 番目の支部を開設しました。私は 1986 年と 1991 年の 2 回、イギリス支部で学びました。
フランシス・シェーファーは多くの質問に答え、多くの講演をし、多くの本を書き、多くの説教をしました。彼の説教のひとつは、ある意味で模範的なものとなり、彼はそれを何度も何度も異なる場所で繰り返しました。今日、私が皆さんと分かち合いたいのは、その説教です。シェーファーのメッセージの主要な考えを概説し、私自身の関連する考えもいくつか加えています。

説教のタイトルは 「No Little People, No Little Places」です。シェーファーはまず、逃亡者としてエジプトを離れ、荒野で 40 年間羊飼いをしていたモーセの話から始めます。そして出エジプト記 3 章では、ホレブ山の斜面での燃える柴での神との出会いが語られます。

出エジプト記を読みましょう。3 章 1 - 7 節 – 「モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。[2]すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。[3]モーセは言った。「なぜ柴が燃えて

いかないのか、あちらへ行ってこの大いなる光景を見ることにしよう。」[4]主は彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります。」と答えた。[5]神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」[6]また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。[7]主は仰せられた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。」

10 節 – 「今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」

荒野で羊飼いをしていたモーセのもとに、突然神が訪れました。神はモーセに、自分は聖なる地にいるのだからサンダルを脱がなければならないと告げられました。そして、主はご自分が何者であるかを告げられました--アブラハムとイサクとヤコブの神である。そして、神はモーセに特別な任務を与えられました。それは、エジプトの支配者パロのもとに行き、イスラエルの民を束縛から解放し、エジプトから導き出すことでした。

これは大きな任務でしたし、モーセは自分が何者でもないと感じています。どうして自分がパロに立ち向かい、イスラエルの民をエジプトの奴隷から解放することができるのだろうか？
11 節にこの様に書かれています – 「モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」」
そして 12 節で、神は 「わたしは必ずあなたとともにいる 」と答えておられます。
モーセがこのメッセージを携えてパロに向かうとき、神が共にいてくださるという約束です。

神がモーセとともにおられるという約束にもかかわらず、彼はまだ躊躇しています。出エジプト記 4 章 1 - 2 節を読みましょう – 「モーセは答えて申し上げた。「ですが、彼らは私を信ぜず、また私の声に耳を傾けないでしょう。『主はあなたに現われなかった。』と言うでしょうから。」[2]主は彼に仰せられた。「あなたの手にあるそれは何か。」彼は答えた。「杖です。」」

これは興味深いです。モーセは、エジプトにいるパロや他の人々が、神が自分を遣わしたと言っても信じてくれないのではないかと心配しているのです。そこで、神はモーセの注意を、一見関係のない話題に向けさせます。主は彼に質問します：「手に持っているのは何か？モーセは自分の手を見て、「杖です」と答えました。それはただの羊飼いの杖で、たいしたものではありません。

さらに読みましょう。出エジプト記 4 章 3 - 5 節 –「 すると仰せられた。「それを地に投げよ。」彼がそれを地に投げると、杖は蛇になった。モーセはそれから身を引いた。
4主はまた、モーセに仰せられた。「手を伸ばして、その尾をつかめ。」彼が手を伸ばしてそれを握ったとき、それは手の中で杖になった。5「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主があなたに現われたことを、彼らが信じるためである。」」

たった一本の木の杖で、神は奇跡的なしるしを行われました。だから、モーセがエジプトに戻ったとき、神は彼とともにおられ、パロに会ったとき、モーセはこのしるしを繰り返し、エジプト人に神の力と主がモーセとともにおられることを示すことができるのです。

神は、一見取るに足らない木片であるモーセの杖を用いて、重要な任務を成し遂げられます。それが今日のメッセージの教訓です。
あなたは何を手にしていますか？今日この聖堂に集まった兄弟姉妹の皆さん。あなたの手には何がありますか？自分は取るに足らない人間だと思うかもしれません.....自分が自由に使える道具など、たいして役に立たないと思うかもしれません。しかし、神はあなたさえも使いたいと願っておられます。あなたが手にしているものなら何でも使おうとしておられる。大きくても小さくても、重要でも取るに足りなくても、神はそれを使うことができます。神の王国のため、神の教会のために何かをするよう神がお求めになった時、神に対して心を開いてください。神の国では、小さな人間などいないのです。このテーマについては、また後で少し触れたいと思ます。

モーセは神の呼びかけを聞き、それに従いました。彼は荷物をまとめてエジプトに戻ります。出エジプト記 4 章 18 節 –「それで、モーセはしゅうとのイテロのもとに帰り、彼に言った。「どうか私をエジプトにいる親類のもとに帰らせ、彼らがまだ生きながらえているかどうか見させてください。」イテロはモーセに「安心して行きなさい。」と答えた。」
20 節 – 「そこで、モーセは妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せてエジプトの地へ帰った。*モーセは手に神の杖を持っていた*。」

見てください。この杖はまだ彼の手にあります。しかし、その杖が今、どのように描写されているかにお気づきでしょうか。

それはもはやモーセの杖ではありません。神の杖です。神はこの杖の所有者であり、この杖を使ってエジプトでご自分の目的を成し遂げられます。出エジプト記を読み進めると、モーセがこの杖を何度も使っているのがわかるでしょう。エジプトに多くの災いの裁きを下すために杖を振り上げ、紅海を割ってイスラエルの子供たちが渡れるようにするために再び杖を使い、荒野で人々に水を与えるために杖を使います。この杖は裁きと祝福の両方に用いられるのです。

モーセの杖は神の杖となりました。今日のメッセージはもともとフランシス・シェーファーが語ったものだと申し上げましたが、彼がこのメッセージを説いたとき、こう言いました（引用させてください）：

> 神が枯れた木の杖をどのように用いたか、その力強い方法を考えてみよう。私たちは、才能、肉体的エネルギー、心理的な強さにおいて限られた弱い存在ではあるが、木の杖に劣る存在ではない。しかし、モーセの杖が神の杖にならなければならなかったように、私であるものが神の私にならなければならない。そうすれば、私は神の御手の中で役に立つことができる。... 私たち一人一人にとっての問題は、この真理を自分自身に適用することである： フランシス・シェーファーは神のフランシス・シェーファーなのか？

それがこの引用の終わりです。そして、私はこの教訓を自分のために個人化することができました： ブラッド・ハウディシェルは神のブラッド・ハウディシェルなのか？ブラッドは自分のものではなく、神のものだという自覚を持って生きているだろうか？そして、彼が手にするものはすべて、神の目的を達成するために役立つものなのだろうか？あなたはどうでしょうか？自分は神のものである、自分は神の 「あなた 」であると意識して生きているでしょうか？

コリント人への手紙第一 6 章 19 - 20 節を引用しましょう –「 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、*あなたがたは、もはや自分自身のものではない*ことを、知らないのですか。[20]*あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。*ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」

ペテロの手紙第一 1 章 18 - 19 節を読みましょう – 「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、[19]傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」

キリストはあなたの罪を赦すために死んでくださいました。キリストは私たちを罪の人生から贖い出してくださいました。つまり、私たちは今やキリストのものなのです。
フランシス・シェーファーは続けます。彼はこう言っています：

> しかし、モーセの杖が神の杖にならなければならなかったように、私であるものが神の私にならなければならない。そうすれば、私は神の御手の中で役に立つことができる。聖書は、小さなものが真に神に捧げられるなら、小さなものから多くのものが生まれることを強調している。真の霊的な意味では、小さな人間も大きな人間も存在せず、聖別された人間と聖別されていない人間だけが存在する。

小さな人間も大きな人間もいません。あるのは捧げられた人間か、捧げられていない人間だけです。あなたは自分を神に捧げていますか？あなたは自分自身と自分の財産を神に捧げていますか？自分は神のものだと考えていますか？もしそうなら、あなたは王の子です。そして、あなたは小さき者ではありません。神の御国では、小さな人間などいないのです。神はあなたさえも用いることができます。

使徒パウロが、キリストの体である教会の各メンバーに与えられている霊的賜物を列挙しています。今日もまた、その考えを分かち合いましょう。

コリント人への手紙第一 12 章 4 - 7 節を読みましょう –「さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。5奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。6働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。7しかし、みなの益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。」

11 節 – しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。
14 - 17 節 – 確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。15たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。16たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。17もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょう。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょう。
21 - 23 節 – そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。22それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。23また、私たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、

教会のすべてのメンバーは重要であり、どの霊的賜物も他より重要ではありません。すべてのメンバーは重要であり、すべての賜物は重要です。派手でない賜物、目立たない賜物でさえも重要です。自分が小さくて取るに足らないと思わないでください。フランシス・シェーファーの言葉を借りれば、「小さな人間も大きな人間もいない.....いるのは聖別された人間と聖別されていない人間だけだ」。私たち一人ひとりが聖別された人となり、キリストのからだの中で自分の役割を果たすことを求めましょう。あなたの役割は、それがどんなに小さなものであっても重要なのです。

私が好きな聖句がもうひとつあります。マタイの福音書 25 章の「タラントのたとえ」です。ここでいう「タラント」とは、技術や性格のことではなく、古代世界ではお金の単位でした。このたとえ話では、ある金持ちが自分のしもべたちに 1 タラント以上の金を与えることです。そのタラントによって商売をして、収益を増やすために与えられました。

マタイの福音書 25 章 14 - 18 節を読みましょう。そこでイエスはこのたとえ話を語ります –「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。15彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もう

ひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。[16]五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。[17]同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。[18]ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。」

この 3 人のしもべはそれぞれ異なる能力を持っており、金持ちはそれぞれの能力に応じた金額を与え、そのお金で商売をすることを期待しました。二人のしもべはその通りにしましたが、三人目のしもべは恐れたのか怠けたのか、ただ地面に穴を掘ってそこにお金を置いておくだけでした。

その物語をさらに読みましょう。19 - 21 節 – 「さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。[20]すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』[21]その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

22 節と 23 節には、二人目のしもべについても 21 節で言及されているのと同じことが書かれています。

そして三人目のしもべが前に出てきます。彼は 25 節でこう言っています。–「 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』」

26 節で、主人は彼を 「悪い怠け者のしもべ 」と呼びました。そして 27 節で、主人はこう言いました。 –「だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。」

そのしもべは、最低限の賢明なことをしなかったのです。銀行に預けることもしませんでした。
この物語を読むと、人にはそれぞれ異なった能力があり、神はその能力レベルに合った仕事を与えてくださることがわかります。コリント人への手紙第一 12 章では、私たちはそれぞれ霊的賜物を持っており、教会全体の益となるようにそれぞれがその賜物を発揮すべきであるとあります。マタイ 25 章、「タラントのたとえ」では、重要なのは与えられた仕事の大きさではなく、その仕事を忠実に果たすかどうかです。三人目のしもべは、忠実さをまったく示すことができませんでした。私は、ここにいる兄弟姉妹の誰一人として、神の国を建設するために何かをすることを怠らないことを願っています。

タラントのたとえを読み、この物語に照らし合わせて自分自身を見つめるとき、私は自分が 5 タラントの人間だとは思いません。....1 タラントの人間だとも思いません。もしかしたら、私は 2 タレントかもしれません。超一流の能力は持っていませんが、ある程度の能

力は持っています。以前、私がカリフォルニアのホーム・チャーチで、そしてここ OIC で、クリスチャン・ミニストリーとしてどのように小さな活動から始めたかを紹介しました。私は時々聖書研究会を率い、15 年以上にわたってサウンドシステム・チームに所属しています。私はあまり耳が良くなく、機械的なことには疎いのですが、細部にはこだわる方なので、サウンドシステム・チームに志願しました。私は長い間、OIC の裏方として奉仕することに満足していましたが、7 年ほど前のある日、アリスター牧師から時々説教をするように頼まれました。人前で話すこと、特に神の御言葉について話すことなど想像もできなかった時期もありましたが、アリスター牧師の要請を受けたとき、私は静かに「はい」と答えました。説教を聞いたり、本を読んだり、聖書を勉強したりと、私はクリスチャン向けの教材を生涯消費してきました。牧師と役員会は、必要なときに私が奉仕することを望んでいます。

さて、フランシス・シェーファーのテーマ 「No Little People, No Little Places 」に話を戻しましょう。私はコリント人への手紙第一 12 章とマタイの福音書 25 章を見ましたが、それはシェーファーの本来のメッセージの一部ではありませんでした。シェーファーは、小さな人間も大きな人間も存在しないと指摘します。大きな仕事があろうが、小さな仕事があろうが、大切なのは神に献身し、神と神の民に忠実であることです。神の目には、すべての人が尊いのです。ラブリ・フェローシップの根幹をなす考え方のひとつは、すべての人は神のかたちに造られたものであり、したがってすべての人には尊厳と価値があるという教義です。1950 年代、フランシス・シェーファーとエディス・シェーファー夫妻が宣教団体を離れ、信仰に関するさまざまな疑問に悩むクリスチャンやノンクリスチャンのために自宅をシェルターとして開放したとき、訪問者たちは自分たちとその質問が敬意を持って扱われ、その質問に対して思慮深く、聖書的で、知的に健全な答えが与えられることを知りました。フランシスとエディス・シェーファー夫妻は、訪れるすべての生徒を心から大切にしていることがわかりました。私たち一人ひとりは神の似姿として造られ、一人ひとりに尊厳と価値があります。

1950 年代の初期、ラブリ・フェローシップのミニストリーはしばしば経済的に苦境に立たされました。

しかし、祈りに対する驚くべき答えもあり、神は彼らの必要を満たしてくださいました。フランシス・シェーファーはしばしば、ラブリ・フェローシップはシェーファー夫妻がいなければ、このようなミニストリーに成長することはなかっただろうと語っています。もしシェーファー夫妻が、小さな場所で小さな人々となることを望まなければ、ラブリ・フェローシップは今日のようなミニストリーへと成長することはなかったでしょう。神の御手の中で成功する道具となるには、謙遜と奉仕の心が必要なのです。

マタイの福音書 20 章 25 - 27 節を読みましょう – 「そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。[26]あなたがたの間では、そうではありません。あ

なたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。[27]あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。」

クリスチャンの牧師として真に効果的である方法は、他者に対して謙虚な奉仕者となることです。このことは、今日の説教のタイトルのもう半分につながります。「小さな人はいない」のと同様に、「小さな場所はない」のです。もしあなたが主の望まれる場所にいるのであれば、一見小さく見える場所にいても、違いはないのです。
一見小さな場所にいても、一見大きな場所にいても、違いはないのです。

今日のメッセージを書くためにフランシス・シェーファーの説教を読み返していたら、何年も前に聞いたことを思い出しました。 神学生の中には、将来自分がどのようなミニストリーに携わることができるかについて、大きな考えを持っている者も少なくないといいます。その中には、ジョン・マッカーサーやジョン・パイパーが持っているような、影響力のある大きなミニストリーを持つことを想像している学生もいます。しかし、そのような考えは場違いだと私は思います。私たちは 大きなことを想像してはいけません。私たちはもっと小さな場所を探すべきです。

シェーファーの説教をもう少し引用しましょう：

> しかし、もしクリスチャンが聖別されたら、小さな場所ではなく大きな場所にいることになるのだろうか？神の目には小さな人はいないのだから、小さな場所もない。神が望んでおられる場所で神に完全に献身すること、これこそが栄光を受ける被造物（栄光を受ける人間）なのだ。...
> アメリカほど、クリスチャンが 20 世紀のサイズ症候群に陥っているところはない。 神は、大きさと霊的な力が一緒だとはおっしゃらないばかりか、（特にイエスの教えにおいては）これを逆手にとって、私たちにとって大きすぎる場所を選ばないように注意しなさいとさえおっしゃる。私たちは皆、大きな働きや大きな場所を強調しがちだが、そのような強調はすべて肉のものだ。そのような言葉で考えることは、単に古い、改心していない、エゴイストで自己中心的な私に立ち戻ることなのだ。

イエスはマタイの福音書 20 章 26 節で言われました – 「あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」

繰り返しになりますが、問題は、私たち一人ひとりが神に捧げられた者であり、神があなたを必要とされる場所で忠実に仕えなければならないということです。場所の大きさは問題ではありません。

シェーファーは、ルカの福音書 14 章のたとえ話を紹介し、私たちが持つべき考え方を示しています。ルカの福音書 14 章 8 - 11 節を読みましょう。そこでイエスはこのように言われます – 「「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、[9]あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください。』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかいて、

末席に着かなければならないでしょう。[10]招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください。』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すことになります。[11]なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」」

私たちはより低い場所を求めるべきです。後にもっと高い場所に招かれたなら、謙虚にその栄誉を受け容れればいいのです。
小さな人も小さな場所もありません。神の王国では、誰一人として小さな人はいません。誰もが役割を担っている.....誰もがキリストの体である教会で発揮すべき霊的賜物を持っています。そして、小さな場所はありません。もしあなたが神の望まれる場所にいるのなら、そこがいるべき正しい場所であり、他の場所を求める必要はありません。

私はこの説教をモーセの話から始めました。モーセの手には何が握られていたのでしょうか？彼は杖を持っていました。あなたの手には何がありますか？それが何であれ、神はそれをご自身の目的のために用いることができます。モーセの杖は神の杖となりました。あなたが手にしているものが何であれ、それが所有物であれ、あなたが持っている能力であれ、その他のものであれ、それを神に委ね、神があなたを通してご自分の目的を働かせてくださるようにしてください。神に捧げるのに小さすぎるものはありません。神の王国には、小さな人も小さな場所もないのです。私たちは皆、神の王国で果たすべき役割を持っています。私は、皆さんが自分の居場所を見つけ、神の働きのために自分自身と自分の資源を捧げることができるよう祈っています。